梅屋の二階

美知代

○

水、燒酎、他にまだ何やらが口中に注がれたと思ふ間に、誰かしら切りに呼び覺ますので、ふと眼を開くと、妾の肩に手をかけて居りますのは、先刻の疎髯。

『もし貴君！』と小聲に呼びますと。

『お丶好え鹽梅に氣がついたの』

『あの如何で御座いませう、到底死切れないでせうか、何卒お慈悲に死なして』

『馬鹿な、何と云ふ、そんげな事有つて好もんか、毒藥も皆吐したで、請合ふて助かる、貴女は仕合せ者じや、命を拾ふたちふもんじやぞ、何うして貴女ばつか活きちよつたか、全くの幸福ぞ』

嗚呼何が仕合せ、何が幸福？、諸共に息絶へてこそ、戀しの人に後れて、此身獨り生存へたとて何嬉しからうぞ。『請合ふて助かる』とは何等慘酷な宣告で御座いませう！妾は落膽しちまつて、ばつたり其所に打伏したなり、泣いて泣いて身も浮くばかり泣きました。

○

いつまで泣いたとて際限は御座いませ

ん、それよりか妾の身は奈何なることぞ、何うと云つて死ぬより外に他に辿るべき道は無いのです。さて死ぬとして手許には毒藥も無く、刃物と云へば鋏は愚か、ペンナイフ一ッありません、それを如何して？　おゝそれ〳〵！

投身と思ひ浮ぶと同時に犇と、胸に迫るは去年の夏の追懷です、まだ其頃は兩家の交誼も親密に、嬉しい許婚の身とて、親々の許を得て二人葉山に遊び、夕暮は樂しい散歩の歸るさ、靄薄黑うこめた磯邊に例ならぬ人だかり、何事と思はずも足を駐めて見ますと、若い男女の抱き合つたのが打上げられて、離れじとでせう、白縮緬の兵兒帶に互の身を堅く結んだ。其の哀れさ！　折柄臨檢の警部は嚴めし氣に髯をひねつて。

『所持品は？』

『何もありません』と巡査。

『身元は解らぬじやらう』

『ハッ、別にどうも……』

『フム、其奴は厄介じやの』

猶二言三言交へて警部の立去つた後には、死屍を取卷いての見物が、とり〳〵の噂。

『美彌さん、可愛さうだね』

『全くよ』とは云ふものゝ、其は只に哀れと感じたばかり、お互に樂しく甘い戀の漿に醉ひしれて、世を、人を、まどかなものとのみ信じて居ましたので、今日此樣な悲しい想に泣かう等とは、夢更らも思ひ設けませんでした、わゝ妾も今は世に儚いものは戀と云ふ、彼の忌はしい言葉を繰り返へさねばならぬ身となつたのです、他人は知らず、妾ばかりは……と思つたものですが……が今更其樣な愚痴を云つた處で何の詮もないのみか、昔を思へば自ら現在の我身に比べられて、遣瀬無さに此胸も破れそう……

わゝ、昔、昔、樂しかつた其昔！

○

思へば思ふ程、妾は彼の女が羨ましい、本當に仕合者だよ、耻も知らず、悲しいとも思はずに、昔を偲ぶでもなければ、口惜しいとも思いますまい、唯互に思ひ合つた戀しい人と抱き合つて死んだので、すもの、嘸未來は樂しく……妾とても、妾とても此樣な死後れの耻を見ようとは……『若しひよつとして貴女が後れたら。僕は死んでも、假令死んでも……魂は美彌さんの陰身に添つてるから』と仰有つた雅男さん、嘸待つてゞせう、運惡く後れましたけれど、妾は屹度後から參ります、其内屹度、屹度甚麼にしてもお跡を追ひますから、恨まないで待つて、頂戴よ。

ネ雅男さん、心變りするような、そんなさもしい美彌じやないワ』

それにしても世間では嘸まア、妾其二人の上を彼是と八釜しく風評して居る事でせう、去年の夏、彼の人等の身投の時だつて、全都の新聞紙は一つとして其記事を載せて居ないものはなく、とりわけ○○新聞等は野合、自由戀愛の結果等と事々しい表題の下に、見ても腹の立つ程、さんざ書き散らし罵り盡して、揚句の果が、やれ女子教育がどうの、男女交際がどうのと、大騷ぎに騷いだではありませんか、今度の事は尚更ら、雅男さんと云ひ、妾と云ひ、お互に高等の教育を受けた身であつて見れば、よもや普通、心中未遂位の記事では濟みますまい、いゝワ、可いワ、よくてヨ、何うせ此通り不公平な社會ですもの、書き度くば何とでも書くがよござんす。

たとひ如何樣に罵つたからとて、何を

かまうものですか、妾は死にます。

○

あれ！　雅男さんが招んでいらつしやるじやありませんか。

一の茶碗を妾の手に……あら！　嬉しいワ、それさへ下されば……

ハイ、妾は確に死にます。

（完）